

# 学びの多様性を活かした 教育プログラム開発事業

---

宮城県教育委員会

# 学びの多様性を活かした教育プログラム開発事業

## 発達に偏りのある児童生徒の特性を活かす教育プログラムの立案

### － 高等学校 －

自立と社会参加

中学校  
小学校  
幼稚園・保育所

発達障害のある児童生徒の知識  
や対応スキルを育てる

魅力ある教育活動

個別最適な学びへ

多様化する生徒のニーズに対応

高大連携を活かした課題研究

#### 【事業1】

大学と県立高校が連携した  
「学びの多様性を活かした教育プログラムの開発」  
県立高校1校を指定し、発達障害を研究している大学研究室と連携し、高校卒業までの学びを支援するプログラムを開発する。

#### 【事業2】

発達障害理解基礎研修(初級コース・中級コース)  
幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の教員を対象とした特性の理解と指導法等について理解を深める研修会を実施する。

01

# 松山高校でのこれまでの取組

(令和4～6年度)

# 令和4年度～6年度（年間スケジュール概要）

	令和4年度	令和5年度	令和6年度
5月	開講式・親子面談	開講式・親子面談	開講式・親子面談
	アセスメント(KABC-II)	アセスメント(KABC-II)	アセスメント(KABC-II)
		アンガーマネジメント	UDL研修会
6月	アセスメントのフィードバック	アセスメントのフィードバック	アセスメントのフィードバック
	アンガーマネジメント	SST (PA)	SST (PA)
7月	SST (PA)	UDL授業実践 講師：バーンズ亀山静子 氏	UDL授業実践
8月	個別教材の作り方 講師：荒川信行 氏		
10月	SST (PA)	SST (PA)	SST (PA)
11月	アンガーマネジメント	UDL授業実践	UDL授業実践

# 取組の概要

(\*1)UDL・・・学びのユニバーサルデザイン

(\*2)MI・・・マルチプル・インテリジェンス理論

## 通級による指導

- 対象生徒のアセスメント(KABC-II)  
⇒フィードバック
- 「個別の指導計画」による指導

## ソーシャルスキル ルトレーニング

- プロジェクトアドベンチャー(PA)

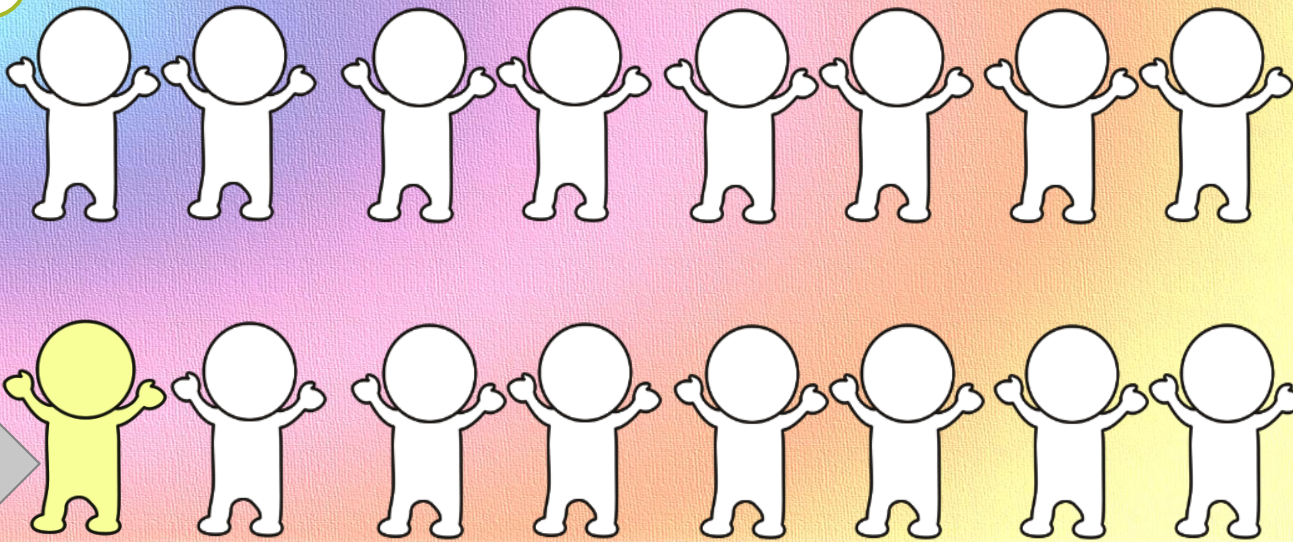
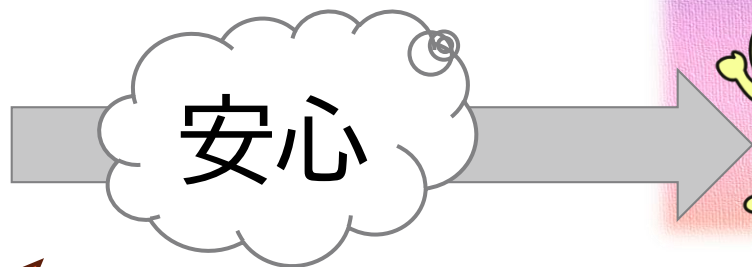
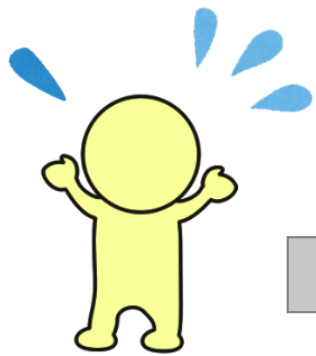
## 授業作り

- 教材作り
- UDLとMIに関する研修
- UDLの授業実践(公開授業)

誰にとっても  
安心・安全な場であること

クラス・学年・授業などの集団

発達に偏りがある生徒



通級による指導  
個別学習

SST  
人間関係作り

UDL  
個別最適な学び

02

岩出山高校でのこれまでの取組

(令和7年度～)

# 令和7年度 年間スケジュール概要

	岩出山高校 「学びの多様性を活かした教育プログラム開発事業」	教職員対象 「発達障害理解基礎研修」
4月	保護者向けプログラム開発事業説明会／職員向け開講式・研修	<p style="text-align: center;"><b>アセスメント、MI 理論UDLの説明</b></p>
5月	ガイダンス／参加者個別面談 アセスメント（KABC-II）の実施／分析及び学習支援方法の検討	<p>8／3～5の3日間（初級） 発達障害の基礎知識研修／IEP立案学校、社会で役立つSST／SST実践演習 アンガーマネジメントの基礎知識／事例検討 サポートブックの作成等</p> <hr/> <p>★12／24～25の2日間（中級） ～指導実践を持ち寄って演習中心に～ 発達障害のアセスメントと見立て・事例検討／個別の指導計画の改善【演習】 MI理論を活用した学級づくり、授業づくり 対応の難しいケース別支援の考え方／実践演習</p>
6月	フィードバック及び個別学習支援／教員職員向け説明	
7月	【授業実践】ソーシャルスキル（SST）① 【授業実践】UDLに基づく授業実践①	
9月	【授業実践】UDLに基づく授業実践②	
10月	【授業実践】ソーシャルスキル（SST）②	
11月	【授業実践】UDLに基づく授業実践③ 職員研修会① 職員研修会②	
1月	報告会（1年目の成果報告）	

視察実施!!

UDL実践3ステップ  
授業デザインシート  
の作成

# アセスメント方法について（希望者のみ）

- K-ABC II（認知尺度と習得度尺度を2日に分けて実施）
- 検査では唯一、読み・書き・算数や語彙などの基礎学力を測る「習得尺度」の評価が取り入れられている。
- 得意な情報処理の仕方や計画性、理解定着力などの認知処理能力（「認知尺度」）と基礎学力の両方を測定することで、具体的な学習支援に繋げることが期待できる検査
- 生徒の得意な認知スタイルを見つけるとともに基礎学力的につまずきがあるかどうかを測定
- 生徒の得意分野と苦手分野を明らかにし、その子の認知処理スタイルに適した学習方法を発見できるため、個別の教育計画や学習支援、授業づくりに役立てる

# アセスメント

## 【生徒A】 <検査結果より>

- 同時尺度（一度に複数の情報を見て、整理したり組み立てたりする力）は強く、絵の一部をみて全体像を把握したり、ゴールに向かって最も効率的な方法を探し出したりすることが得意である一方、継次尺度（見たものや聞いたものをそのままの形で再生する力）が弱い。見たり聞いたりした情報を数秒間記憶しておくこと（短期記憶）が弱い。
- 図や話されたことの全体の大まかな形や雰囲気やパッと理解することには長けているが、図や文章の助詞など細かい詳細を見ること、教師の口頭説明だけで進む授業、板書がなく口と頭で次々と指示される場面では困難さが出てくると思われる。

# アセスメント

【生徒A】 <学習の進め方のアドバイス（歴史）>

- 「全体→部分」の構造で学ぶ  
全体の構造をつかむ力や視覚的に情報を整理する力があるため、単元のはじめに「時代の流れ」「歴史の大きなテーマ」などの地図や年表を提示することで、全体像を把握しやすくなる。
- フィッシュボーンチャートやマインドマップで整理する  
「幕府の仕組み」「戦争の原因と結果」「改革の流れ」などをフィッシュボーンチャートで図示し、因果関係を視覚的に整理する。特に、「何が原因で、どうなったのか」という因果の構造が可視化されることで理解が深まる。

# アセスメント

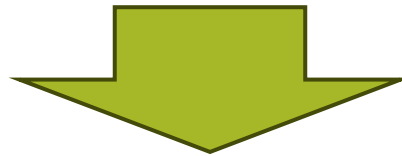
## 【生徒A】 <変容>

- アドバイス通り、勉強方法を変えたところ、簡潔にまとめる事ができるようになった。無駄がなくなり、内容が頭に入りやすくなった。
- レポートやまとめの作業で自らの考えを上手に伝えることができるようになった。イベントのポスター等も簡潔に相手に伝わるように作成することができた。

# SST

## UDLとSST

UDLは「多様な学習者に対応する柔軟な学習環境」の構築を目指す。そのために個別最適化と協働を重視。



SSTを通してコミュニケーション・自己表現・協働スキル（聞く・話す・受け入れる・助け合うスキル）を育てることによりUDLのスムーズな実践に繋げる。

# SST②

## 【1・2年生の活動の写真】



「パイプライン」  
パイプを繋げてボールをゴールまで運ぶ



# SST②

## 【3年生の活動の写真】

「ロボット」相手に自分の動きを任せる



「ポジティブ  
シャワー」  
短所を長所に



「目鼻口」  
相手にどの様に  
情報を伝えるか



# UDLの視点を取り入れた授業について (概要)

UDLの視点を取り入れた授業は以下の3点に注意しながら作成

1. ルーブリックを活用した授業のゴールの設定
2. ゴールに向かう学習者が直面するバリアの想定
3. バリアを抑え、ゴールに向かうオプションの用意

UDLガイドライン(ver.3.0)をもとに授業をデザインしていきます。

生徒はゴールをもとに、オプションを適宜選択しながら、学習に取り組み、主体的に学ば力を身に付けていきます。

令和 年 月 日( )第 校時 第 学年 組( 名) 指導者( )

1 授業の目標(ゴール)のルーブリック(子どもがどうなることを目指すのか)※1つで構わない

評価の観点	A	B	C
知・技 思・判・表 主体			
知・技 思・判・表 主体			

2 今回の授業で事前に想定したバリアと用意したオプションを記入する。※最低1つで構わない

事前に想定したバリア	用意したオプション	UDL チェック ポイント

3 授業の大まかな流れ

(1)導入【目標の提示】(○分)

(2)展開【理解と表出のための活動】(○分)

(3)結末【振り返りと次回のための準備】(○分)

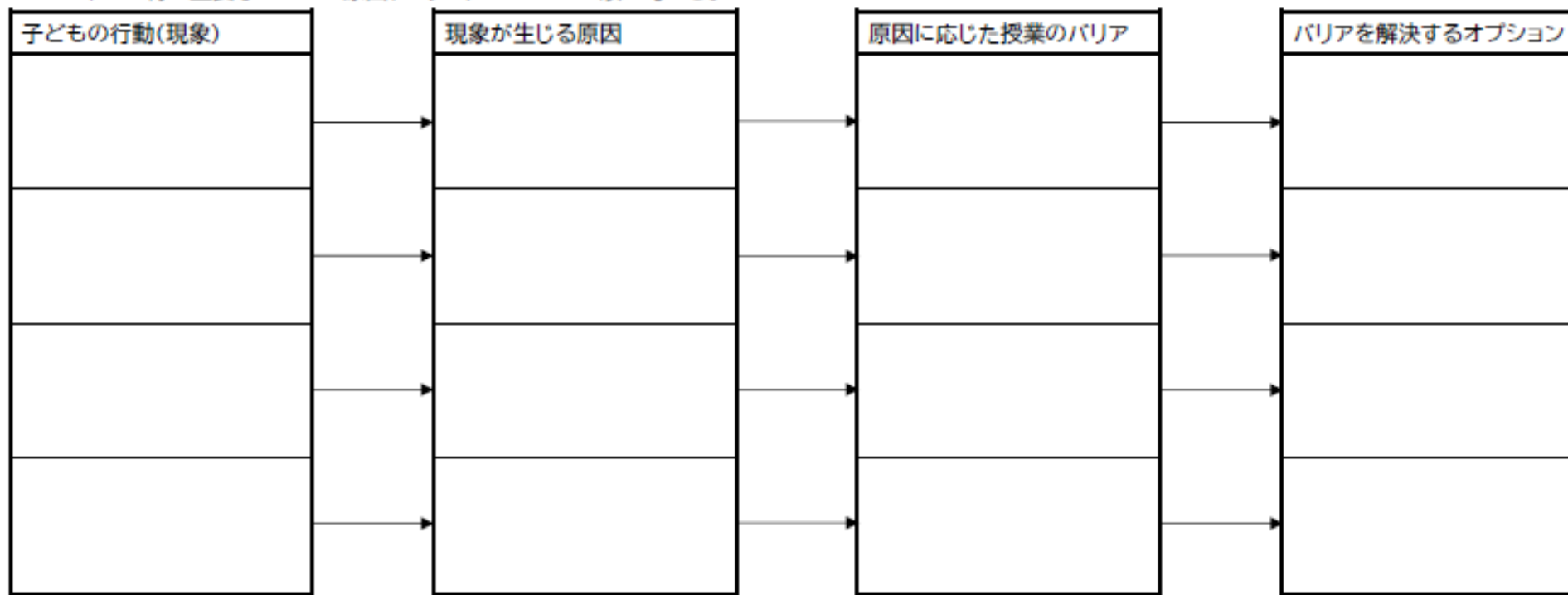
# UDL授業 デザインシート

# 現象からバリア・オプション を考えるワークシート

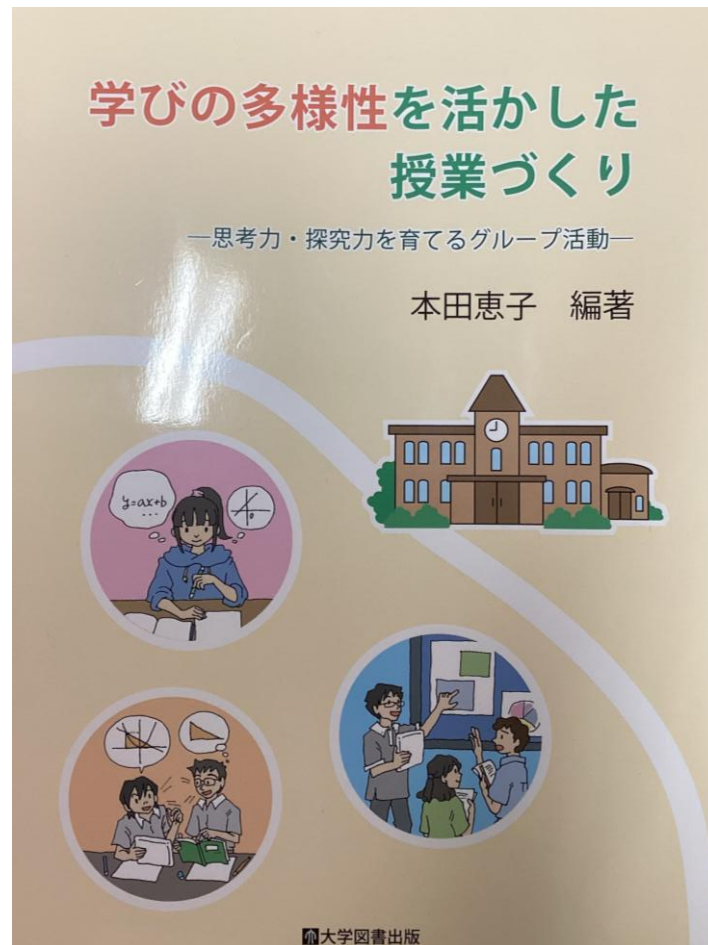
1. バリアを見つけるためのヒントになる子どもの行動(現象)を挙げる。

--

2. この中から特に重要なものから原因、バリア、オプションの順で考える。



# 教員向け研修の様子 (UDLによる授業づくり)



# 教員向け研修の様子 (UDLによる授業づくり)



令和7年11月12日（水）第3校時 第1学年1組（習熟度：13名） 指導者（三宮 遥香）

1 授業の目標（ゴール）のルーブリック（子どもがどうなることを目指すのか）※1つで構わない

評価の観点	A	B	C
知・技	自分の力で2辺の長さとその間の角の大きさが与えられた三角形の面積を求めることができる。	ヒントを用いながら2辺の長さとその間の角の大きさが与えられた三角形の面積を求めることができる。	2辺の長さとその間の角が与えられた三角形の面積を求めることができない。

2 今回の授業で事前に想定したバリアと用意したオプションを記入する。 ※最低1つで構わない

事前に想定したバリア	用意したオプション	UDL チェック ポイント
口頭説明が多い	解答手順を見返すことができるような視覚情報(板書・プリントなど)を用意	1
解答の手順が見えない (公式のどこに対応するかがわからない)	公式と与えられている数値がどのように対応しているかを視覚化する(求めるために必要な情報にマークを付けるなど)	2
計算に必要な三角比の値や三角比導出のためのヒントが(手元に)ない	周りに聞いたり、過去の授業プリントや教科書などを見て調べたりできる環境を整える	4

3 授業の大まかな流れ

(1) 導入【目標の提示】(5分)

- ・本時の授業プリント配付・授業始めの岩高スタンダードの確認・本時のねらいの確認

(2) 展開【理解と表出のための活動】(40分)

- ・例題を用いて解法・公式の確認
- ・練習問題を用いて演習

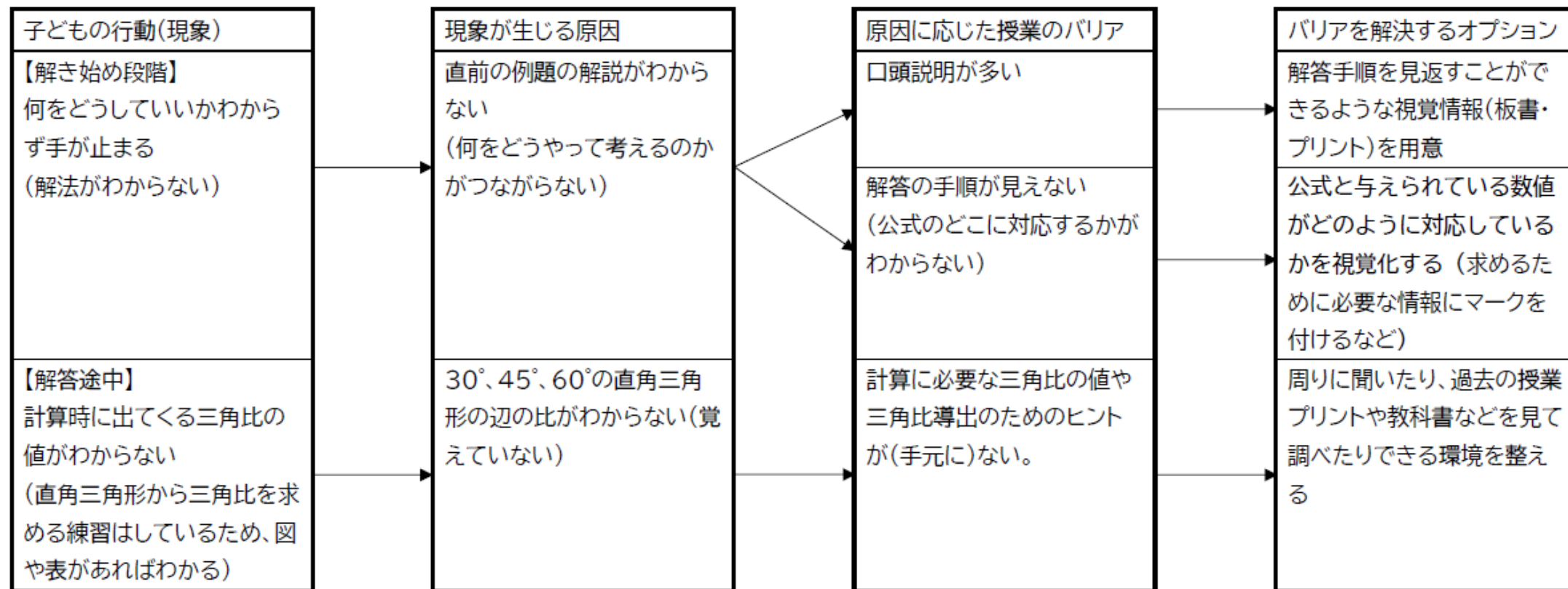
(3) 結末【振り返りと次回のための準備】(5分)

- ・授業終わりの岩高スタンダードの確認・本時の振り返り

1. バリアを見つけるためのヒントになる子どもの行動(現象)を挙げる。

- ・解説後、問題演習に入っても、何をどうしていいかわからず手が止まる(解き始めることができない)。
- ・三角比の求め方はわかる(直角三角形から読み取ることにはできる)が、計算時に出てくる三角比の値がわからないため、手が止まる。

2. この中から特に重要なものから原因、バリア、オプションの順で考える。



# 授業の様子

一斉教授型から学習者主体型への転換



# 成果（生徒）

人間関係の構築に関する記述が多数

- ・ 協力の大切さを実感した。
- ・ 年上（先輩）との関わり方を知り、学年を越えたコミュニケーションがとれるようになった
- ・ 恥ずかしがらずに伝える／話すことのハードルが下がった
- ・ 自分から声をかけ、助け合う事ができるようになった

また、「誰にでも優しく接したい」など、対人姿勢の改善を挙げる回答もあった。（他者都の違いをを受けいれる姿勢が身に付いた）

# 成果（教員）

- 生徒の様子や集団の動きにより目が向くようになり、生徒理解が深まった。
- 生徒一人ひとりに寄り添った関わりができるようになった。
- 生徒へ積極的に声をかけることができるようになり、これまで関わりの少なかったクラスや学年の生徒とも自然に関係を築けるようになった。
- 言葉の選び方や距離感を工夫することで、良好な人間関係が形成できることに気づいた。
- 生徒との心理的距離が近づき、人見知りも軽減した。
- 指導の際に、答えを与えるのではなく、生徒自身に考えさせ、気づかせる声かけや発問の重要性を理解した。
- 「こうしたら」と教えるのではなく、対話を通して生徒の主体的な学びを促す関わりを意識できるようになった。

# 学びの多様性を活かした教育プログラム開発事業

R7～R8モデル校 岩出山高校と目指すところ

**教員** 生徒のひとりひとりの特性を把握し、「SST実践演習」や「UDLに基づいた授業づくり」を通して、誰もが学びに参加しやすい、魅力ある教育活動を展開する。

**生徒** 自分の「良さ」や「可能性」に気づき、「自分の学習状況を理解して、主体的に学習を調整」したり、多様な人々と協働しながら「自立と社会参加に向けて学びと体験を積み重ねる。

主体的に学習に取り組む

学ぶことに楽しさを見いだす

自分自身に自信を持つ

# 学びの多様性を活かした教育プログラム開発事業

R7～R8モデル校 岩出山高校と目指したいところ

**教員** 生徒のひとりひとりの特性を把握し、「SST実践演習」や「UDLに基づいた授業づくり」を通して、誰もが学びに参加しやすい、魅力ある教育活動を展開する。

**生徒** 自分の「良さ」や「可能性」に気づき、「自分の学習状況を理解して、主体的に学習を調整」したり、多様な人々と協働しながら「自立と社会参加に向けて学びと体験を積み重ねる。」

主体的に学習に取り組む

学ぶことに楽しさを見いだす

自分自身に自信を持つ